スポーツ欄

‖三部籠球部‖

三縣對抗籠球大會

六月十九日 於都城

川内15-19大宮

阿蘇19-17川内

メンバー

G阿部 藤田 牧好

C戸木田 橋口

F山田 堤 木田

選手談

一回戦大宮高校との對戦はアタック戦法に惱まされたがよく勝を制する事が出來た。

二回戦前半はコンディションよくリードしたが後半延長戦に持ち込まれ、あせり氣味で最後を壓えられてしまつた。今後は一層頑張つて皆様の期待に沿うつもりです。

‖野 球‖

六月十一日於鴨池

新制高校記念野球大會、

◆鹿一部6-3川高

捕中島
遊渡邊
中荒木
右井上
左渡邊
P.H池田
二出水
p.H黒肱
投丸山
三川畑
一岩崎

前半エラー續出し大点リードさる。四回奮起して三点を打ち返し後半全員結束して好プレーを見せて無得点に食ひ止む。九回無死P.H四球に出たが後投積かず萬事休す。

中島の攻守に亘る活躍丸山の繼投、遊渡邊の好守、川畑の覇氣等印象に殘る。夏の大會を期待して今後の精進を祈つて止まない。（楠元）

◆練習試合

六月四日於川高

川高9-5加高

投丸山-捕中島

二塁打 池田 渡邊（恭）

‖排 球‖

六月廿七日於鹿市二部

鹿五部2-〇川高

‖水 泳‖

六月二十日遥々遠征の加治木高校を迎えて善戦の甲斐なく僅か四点の差で敗れた。特に光つてゐたのは自由型八百の永井二百の山本のスムースな泳ぎである。最後の繼泳にタッチの差で惜敗。ブレストに好選手が少なく自由型百の寄井田の缺場が痛かつた。當日の總得点次の如し。

加高48-44川高

縣大會の奮斗を切望す。（楠元）

‖二部排球部‖

四縣對抗鹿兒島縣總豫選大會六月廿六日

一回戦

川高二部2-1加高最初試合不慣れの爲スムースにいかず、二セット後落ちついてよく勝を制す。

二回戦

指高2-1川高二部指高のサーブと守備に押されて惜しくも敗れ去つた。

出場メンバー

前衛 白男川 吉田 福元

中衛 杉本 原田 脇園

後衛 山内 平山 新門

縣水泳大會

七月四日 於鹿高三部

自由型（關係分）

百米 寄井田 四位

二百 澤口 一位

〃 山本 二位

四百 永井 二位

〃 山本 三位

八百 永井 三位

〃 平松 五位

繼泳 二百 一位（山本、江畑、澤口、寄井田）

八百 一位（山本、寄井田、永井、澤口）

背泳 百米 山内 四位

〃 池田 五位

五拾 池田 五位

（得点）

加高二部五七点

川高一部四一点

鹿市三部二五点

鹿宮對縣陸上競技予選

七月四日於鴨池

百米 山本 二位

二百 山本 二位

四百 田中 五位

八百繼走 四位

砲丸 川久 二位

圓盤 長嶋 四位

川久 六位

走高 軍神 五位

順位 出水二部。志布志一部。鹿屋二部。川内一部。大口二部

一部校友會各部役員

（二十三年度）

校友會名譽會長 逆瀬川 助熊

校友會長 川口 雄三郎

各部名	部長	委員長
總務	田原文雄	押野昭生（三年）
圖書	池田安行	龍園武藏（三年）
文藝	寺田四郎	楠元公平（二年）
美術	大泉米吉	花田一利（二年）
辯論	古市一	福留久光（三年）
音樂	川口辰五郎	本田忠丸（三年）
映畫	中村 榮	原 一郎（三年）
自然科學	吉田三郎	池田 統（二年）
水泳	江口日海夫	永井新八（三年）
競技	宮里正信	川久源吾（三年）
野球	緒方惟利	井上守忠（三年）
排球	村田秀德	濱田辰藏（三年）
籠球	押野慶磨	東田政光（三年）
体操	緒方惟利	今村幸次（三年）
蹴球	神野榮熊	好士崎憲二（三年）
ラグビー	大迫佐吉	山路祐平（三年）
卓球	桑畑正秋	田中幸三（三年）
相撲	古市一	須田 享（二年）
庭球	山本一	西 勝郎（三年）
山岳	嘉野長夫	井手口幸彦（三年）
園藝	湯之前信一	楠木敬一（二年）
購買	池田國義	上野幸一（三年）

文藝欄

飛込臺

一部 中三 田中貫雄

私は胸を躍らせながら下を見下した。生々した大きな青い海の姿が私の眼に映つた。昨夏以來一度も海に接しなかつた私の心には、懐かしい母の様な温い愛情が廣がつて來た。穏かな漣、美しい碧色、私はしばしうつとりとして眼下に横たはる比類ない纖細と莊嚴と、眞理の表現を見つめた。「飛ぶぞ！」次の瞬間私は足場を見計らつて大きく身構へた。

短歌

一部中三 水野草明

待ち佗びし兄の便りのおとづれに
織うちやりて母かけ來る　二部一年 鄕 榮

夏菊の咲きてかなしく弟の
命日來にけり思出多し　一部二年 若松芳樹

早苗田の螢は高く又低く
五月の雨におはれ行くかも　一部二年 石田薊木

雨やみて雲流れ行く山脈の
頂き長くつゞきたるかも　一部二年 鮫島白萍子

吾が姉は美しかりき
我が姉は優しかりきと　憤りつゝ偲ぶ

悲しみに病床這ひいでゝ灯ともせば
一輪ざしの花ゆれてあり

短歌

花　山本 一

白百合のたそがれに揺れてしづもれる
部屋にならべるすゞしき瞳

さりげなく別れしひとをしのびつゝ
楠の若葉のさゆらぎにをり

唐招提寺　大泉米吉

初なつのあかるきまひるしづもりて
唐招提寺日かげうつらう

堂ぬちのかそけき光に多聞天
手ふり脚あげ何かなしむぞ

種子島　竹山菊麿

きざはしにこぼれ敷きたる白萩の
眞晝淋しも府元屋敷は

明日は入る汽船の名前を云ふ兒ろは
島の暮らしも馴れて來にけり

暮色

一日のすべてを愁めおほひかくす様に
夜のヴェールが
静かにあたりをつゝみ始めた。
迫る薄闇にふつと白い蛙が
その度に暮色は深く濃く
暗やみは廣がりまして行く。
まるで人のあえぎの様な
ものを
暮色の中にたゞよわせて
それは消えて行く
黒い廣いまくに
すべて／＼が吸ひこまれる
言ひ知れぬ重みと共に

二部三年 福元暉子

思索

一部二年 鮫島白萍子

私はうつむいて坂を上つてゐる。
〈人間の皆が何ものかを求めている。
心の空虚をうめようとして……〉
人間の價値を見いだそうとして
默々と歩みをつゞける生命
私はしみ／＼と神の絶對をおもふ。
道は又曲る。
私はひとりではないと信じつゝも寂しい。
草叢へ足をのばす。
そして思ひきり
神の愛を專有したく思ふ

俳句

一部二年 鮫島白萍子

キリスト教の時間しづかに夏座敷

炎天やはるかに砂利を掘る音す

二年 楠元悲愁

梅雨晴れや流れ木數ふ土堤の子等

菜蘇こゆき葉に点々と螢

廣松　二年 石田薊木

道祖神卯の花垣にもたれをり

梅雨入りして蛾の電燈に動かざる

二年 池田 統

汽笛遠く夏野に消えて蛙鳴く

手綱の煩さめやらぬ初夏の背

二年 緒方碧苑

びわ映えて鐘の余韻に夕さざる

かごの桑滿ちて乙年の頬映えて

二年 若松芳樹

早苗田をわたる螢火まゝ鮮し

二部 中三 [illegible]仙鄕子

客去りて座敷のひろく風光る

一部二年 [illegible]和登

馬ぐらをゆすぶる音や夏木立

二年 松下健太郎

蛙なき留守居はわびし梅雨の夜

二部三年 川添洋子

またゝきにゐる瞳に螢去る

一部二年 山内紫鄕

五月雨に煙りて浮かぶ醫院の灯

二部 石山つゆ子

亡き姉の事思はるゝ浴衣かな

中三 木原房子

蛇目傘のゆられて行くや春祭り

中三 勘場ミヨ子

通されし座敷の床のカンナかな

一部二年 伊知地稔

ほろ／＼と乙女の手折る山卯月

二部 杉山のり

梅雨晴れてとんぼ舞ひ交ふ夕日かな

連絡船—引揚者の手記—（上）

二部 併中三年 大山 德

一日中を懐しの故郷に引揚げる日本人を乗せた貨物列車は、南朝鮮の山峡をゆるやかに走つてゐる。十二月と云へば灰色に曇つた此の地特有な重苦しく冷々とした日が、幾日も續くのにこの二三日の空模様は青い色をのぞかせたうらゝかな天氣だ。收容所で前日聞いていた朝鮮人の列車襲撃といふ不穩な形勢もなく、窓外は幾年も見なれたポプラ並木、饅頭を伏せた様な藁葺屋根の聚落其れを圍むこんもりと茂つたなつめの木、なごりのつきない景色だ。列車はおだやかな冬空のもとを刻々とF港に近づいてゐた昨晩から前途の不安に一睡もしない睡眠不足と疲勞とに打うちのめされてともすれば瞼が重くなりがちだ。それでも側に兩親がゐると云ふ事がどれ程、私の氣持をひきたてゝゐる事であらう。「みなさん、この列車中に体の調子の悪い人はゐらつしやいませんか。次の列車は病院車でありますから米軍の醫藥設備がしてあります少しでも具合が悪るかつたら、遠慮なく申出て下さい」。輸送責任者の父が聲を大きくして呼びかけてゐる。今別れてはまたいつの日にか會へるであらう。學友とつきぬ話をくり返しては、こくりこくりと居眠りをしながら、それを聞いてゐた。「おばちやん向ふの丘に立つてゐる變な木は何といふ木なの」。「あれは竹ですよ。竹の林ですよ。「あゝあれが竹なの」。この國に生れた子供達が竹の林を見て不思議な面持である。長い間腸を病んで弱りきつてゐた蒼白い顔の母が子供達に物憂げに答へてゐたが途中でとうとうたまりかねて、葡萄糖の注射をしてもらつた。やがて列車は驛についた。R江の上流の菜園にかこまれた驛舎のほとりの小川の清い流れで、洗濯する朝鮮の娘が、大勢日本人の引揚げを言葉すくなく、ぼんやりと見物してゐた。其の中の幾人かのやるせないせつない面持ちをしてゐる者を私は見逃すことは出來なかつた。しかしそれも心ない米兵の突然のピストルの實彈の練習にみな菜果園に消え失せてしまつた。

―朝鮮の娘達よ幸福なれ―

列車は黄昏のあかね色に染つたF港に、のろのろとたどり着いた忽ちむらがる鮮業荷物運搬人何とかして、引揚者の目をかすめて、荷物をせしめんとする者、言葉巧みに近寄る紙幣交換人、何といふどんらんな人々の群よ。あゝ敗戦のみじめさよ。私はこゝに人間の野獸に近いみにくさを見た父は暴狀の限りをつくす群衆の叫喚と怒號の渦の中を一行を指揮して、とうとう埠頭にきりぬけて行つた米兵に誘導せられ、保護せられ、心の緊張と不安がほどけてふり返つて見る、F港は丘陵を切り開いた傾斜面には、流石にエギゾチツクな建物が多い。此の港の相貌も異國風な匂ひにだんだんとつゝまれて埠頭にたどりついた。私はこのまゝ兩親にともなはれて遠い船路の旅にのぼりつゝあるのではないかとさへ思はれ[illegible]ら。

◇原稿募集◇

論文、作文	八百字以内
人氣者の横顔	三百字以内
メガホン（世論）	四百字以内
短篇小説、創作	千二百字以内
詩	二十行以内
和歌	五首以内
俳句	五句以内
其の他校内社會一般（氏名明記）	

廣く學園に取材し身近かな問題を主とせる作品を望む

毎月十五日締切（次號は八月十五日迄）

川内市向田町ホームラン内
學校新聞編輯室宛

◎納税標語募集◎

川内市

納税は再建の鍵である事を簡明に述べて自發的な協力を促すもの

用紙は葉書　一人二句以内

締切九月五日　發表九月中

川内市役所　税務課長宛

一等五百円以下三等及び佳作まで

◎學苑定例俳句會延期◎

七月二十日午後一時　向田町楠元宅

兼題　虹、蟻、かきつばた、ねむの花、

雜詠五句内

WINDOW

姓名は編輯部にあります生徒同志の欄です。大いに御利用下さい。（係 松下）

求 啄木詩集 No.1
〃 破戒 No.2
〃 武田鱗太郎全集第一巻 No.3
〃 獨乙語コンサイス辞典 No.8
〃 アルバイト（夏休暇） No.15
〃 下宿（人物保証） No.16
〃 英語大辭典 No.17

文藝部新聞同人

顧問 寺田先生　須田 享
池田 統　關 和登
石田耕三　長園 賢
伊地知稔　松下傳太郎
緒方 勝　本吉修二
楠元公平　山内將史
鮫島政一　若松良武